竹取物語の面白さ

南波浩

竹取物語の本当の面白さは、一体どのような点にあるのだろうか。

「文学の面白さ」というものを、突っ込んで考えると、結局、作品そのものの本質、芸術性、永遠性ということと、切りはなしがないものになると思われる。

ところで、竹取物語の本質については、すでにこれまで、多くの人々によって、いろいろに説かれている。たとえば、伝奇体小説（藤岡作太郎）、王朝世態小説（津田左右吉）、永遠美を幻想するお伽噺（和辻哲郎）、天上憧憬小説（鈴木敏也）、浄土希求小説（橘純一）、神仙譚的恋愛小説（吉沢義則）、芸術童話（島津久基）、幻想的な神仙小説（武田祐吉）、永遠の感傷としてのお伽噺（池田亀鑑）、古伝承をお伽噺として物語化したもの（石母田正）、貴族社会の伝奇的恋愛小説（西郷信綱）等々である。

竹取物語の構成を分類してみると、

(一) かぐや姫の生い立ち……（化生説話・致富長者説話）
(二) 求婚（つまどい）……（求婚難題説話）
　(1) 仏の御石の鉢（石作皇子）
　(2) 蓬莱の玉の枝（車持皇子）
　(3) 火鼠の皮衣（阿部のみうし）
　(4) 龍の首の玉（大伴の御行）
　(5) 燕の子安貝（石上麻呂）
(三) 御狩の御幸……（相聞説話）
(四) 天の羽衣……（昇天説話）

となる。この竹取を、全体として、どう読むかということで、竹取の本質が決定されるわけである。竹取は、素材形式の面では、前代からのもろもろの説話形式を継承して、その構成をなしているが、それら民族説話のわくを、どのような点で発展させ、どのように新しいものに、しあげているか。また、内容面では、民族説話の世界から、どのような新しい世界を形象し、その中で、作者は、どのような人間関係を問題にし、それにどのように対処しょうとしているのか。また、そのことが日本文学史の上に、どのような意義を提起しているのか。それらをひっくるめて、たとえば紫式部が、竹取物語を物語文学の元祖と規定している意義は、とくにどの点にあるのか。

こういう点を追求して行くことが、やがて竹取の面白さや、その本質を明らかにし得ることになるのではないかと思われる。このように、文学史の発展の相の上に、はっきり、竹取をつかまないと、現代とのつながりも、文学発展のためのエネルギーをも、つかめないと思う。

ところで、竹取の構成内容をみるとき、従来、竹取の本質を云々した人々の多くが、竹取の首段（すなわち(一)）や、終段（(四)）を重視し、お伽噺と言ったり、幻想的な浄土希求、天上憧憬、神仙的な、浪漫的伝奇小説などと言っているが、竹取が物語文学の元祖といわれる第一の点は、幻想的、伝奇的な従来の伝説説話のもつ要素を、巧みに利用しながらも、しかも竹取以前の伝説説話の荒唐無稽性や、時代の進展につれて非現実的と思われるようになったものを、知的に巧みに処理し、現実社会に密着した現実性をみなぎらしている点にあると思う。それは、とくに、竹取作者がもっとも多くのスペースをついやし、しかも、もっとも文学的な形象技巧を駆使して描いている、五人の貴族をめぐる求婚難題の部分にあらわれており、そこでは、上流貴族たちが、家柄や地位に似合わず、無恥、無能、無気力であり、あるいは陰険であり、あるいはお人よしすぎる人間であったという、当時の上流層の内情――すなわち真実を、求婚難題をめぐる笑いの中に、みごとに描き出している。いわば、当時の上流貴族社会の、ヴェールの中にひそむ真実を、典型的な人物形象の上に、リアルに、また笑いを誘うためには時として、誇張的に、みごとに描きだしている。

文学で、何より大切なことは、社会現実の中から、真実なものをつかみ、それを典型化して、描き語ることである。この点で、竹取物語は、みごとな成果をあげていることに注目すべきであろう。

竹取物語の作者は、たしかに、当時の上流貴族社会の実情に、批判意識をもった人であった。しかし、竹取作者は、だからといって、貴族社会を全面的に排撃するとか、否定しょうという意識ではなく、作者自身も、その貴族階級に連る一人であったろうし、自分たちの社会が、よりよいものになることを希んでいたにちがいない。そこで、自分たちの社会の一つの著しい風潮であった「色好み」をとり上げた。その「色好み」は、当時の貴族社会では、本来は、教養と風流をともなう情趣あるものであった。このことは、

その頃の伊勢物語・宇津保物語・大和物語などにおける「色好み」の用例を、詳細に検討すれば明らかである。ところが、その「色好み」が、本来の情趣的風格を失い、家柄や地位や、金力、権力等にたより、しかもそれが、一皮はげば、無恥、無能、無気力、陰険な人々によって代表されている社会の実体を、笑いの種にしようとしたのであった。それは、当時「色好みといはるるかぎり五人」と謳われながら、名と実とのともなわない、そしてまた、尊貴、権門、武門の名にともなわぬ、実体の暴露であり、笑いであった。

これによって、物語の読者は、登場貴族の無恥、無能、無気力の実体を笑うとともに、貴族社会の内面的真実を知らされて、文学の面白さを味ったのである。

ところで、このような作者の発想が、もし、形をかえ、正面切って、貴族社会の批判、暴露、痛撃という形式をとっていたとしたら、当時の物語読者層（それは、主として貴族社会の子女であった）には、なじみにくいものになったにちがいない。

それを、竹取作者は、在来の竹取説話という、なじみ深い説話の形式を借用し、「今は昔」と時代をカムフラージュして語り出しながらも、もはや、従来の伝説説話の単なる模倣継承ではなく、民族的形式を巧みに活用し、現実社会の現実的な、新しい内容を盛り込んだ、新しい文学作品として、しあげているのであった。

ここに到るまでの竹取説話には、多くの人々の参加によって、享受者に則した変移があったろうが、竹取説話のかっての非現実的な単一性を止揚して、現実社会からの材を取りいれ、現実の中にひそむ真実を、典型化して描き出したのは、物語文学としての竹取作者の手腕であった。それは民族的形式を巧みに活用して、新しい社会的真実を描き出したのである。

その中心が、まさに、求婚難題の段なのであった。この点こそが、紫式部をして、物語の元祖といわしめた点であったと思われる。

また、単に世態小説として、正面切っての貴族社会の批判や暴露とせず、民族的形式を借りて、読者に親しみを持たせながら、軽い笑いの中に、貴族社会の実体を描き出したところは、結果として、日本における諷刺小説の元祖とも言えるであろう。

ちょうど、それは、十九世紀において、ゴーゴリーが「検察官」を書いた発想に、きわめて似かよったものをもっているのである。ゴーゴリーは「検察官」によって、十九世紀前半の、収賄、公金費消、その他さまざまの汚職や社会悪に満ちたロシアの官吏社会の現実の中にひそむ真実を、典型的な、笑劇（ファース）として描き出した。しかし彼は、そこで官

僚を痛烈に排撃してやろうなどという、強い反抗意識をもっていたわけではなかった。ただ、その欠点を笑いとして描き出そうとしたものであったが、それがあまりにも、当時の社会の真実にふれ、それを典型的にとらえていたために、享受者に強い諷刺性を感じさせ、熱狂させたのであった。それこそは、ゴーゴリーが、深い洞察力をもって、社会の真実を描き出したためであり、リアリズムという手法の成果であった。

竹取の作者は、本来の「色好み」らしくない、いやらしい、笑うべき色好み、虚偽・無恥・無能・無教養のにせ色好みの世界を、求婚難題形式を借りて、貴族達がつぎつぎと失敗して行く過程を通して、笑いとして描き出し、笑いの種としたものであった。そこで、作者は当時の貴族社会の現実に密着して、貴族たちの生活の真実を、きわめて、ユーモラスに、しかも、きわめて、リアルに描き出したのであった。この親しみ深い民族的形式を借り、ユーモラスな筆致による、新しい真実の反映が、多くの読者をよろばせたのである。竹取物語の中心的な面白さはこの点にあった。

そして㈢の段においては、上述のようなにせ色好みに汚されない、清純な、情趣深い世界の存在を肯定し、希求し、帝とかぐや姫、翁と姫との親情を、これまた、きわめて現実的な筆致をもって描き出している。

最後の㈣のかぐや姫の昇天は、偽色好みに毒されない、清純無汚の乙女の象徴であり、汚れ多く、みにくい世界にあって、なお、汚れのない美しい人と世界を希求する、作者の理想の象徴として、固来の竹取伝説の終幕が、美しく生かされたものであった。

五人の貴族の実在的名称の意味についても、従来諸説があるが、それについてのわたしの見解は、近刊「竹取物語」（創元社刊）において、詳説したので、ここで話し得なかった他の多くの部分とともに、参照していただければ幸いである。

竹取物語の生命は、まさに、王朝貴族社会の現実の中にひそむ、真実のユーモラスな反映という点にあり、竹取の芸術性は、幻想的、浪漫的な民族的形式と、現実的な内容との、有機的な統一調和の点にあるのであった。

竹取物語は、伝統を生かし、すぐれた創造をとげた、一つの典型であった。